

中西 聡著

## 『海の富豪の資本主義』

—北前船と日本の産業化—

深井 甚三

著者は先に『近世・近代日本の市場構造』を出版し、蝦夷地・北海道の海産物流通を北前船による廻船輸送の問題も加えて実証的に解明されている経済史研究者である。大学院の時より北前船に関する研究にも取り組み、その成果の一端を右の著にも取り上げられ、その後本格的に北前船主の経営分析を進められ、本書を刊行された。

本書は明治以降における日本の資本主義形成の中での地方有力資産家、北前船経営者の役割解明のために近世を扱うものの、近代の企業勃興にかかわる彼らの役割と経営行動を論ずる研究書である。近代に踏み込まずに、専ら近世の問題を扱い、しかも経済史・経営史研究者ではない評者のような者が書評を行うのは著者に失礼のようにも思うが、北前船展開の中心地で、後に示すように本書で非常に重要な評価を与えられた北陸の富山県に居住して、海運史外に前田藩領社会の地域史研究も行っている者には重要な研究書なので、あえて書評を引き受けさせていただくことにした。

まず、本書の内容を示すことにしたい。本書の構成は次のようになっている。

序章 海の富豪からみた近代日本

第Ⅰ部 商品・資本市場と北前船主

第1章(場所請負商人から巨大漁業家へ)・第2章(買積船商人の多拠点化と資産運用)・第Ⅰ部補論(北陸親議会加盟北前船主の垂直統合経営と全国市場)

第Ⅱ部 地域経済と北前船主

第3章(青森県船主の海運・酒造・銀行経営)・第4章(新潟県船主の海運・農業経営)・第5章(石川県船主の海運・不動産経営)・第Ⅱ部補論(東岩瀬・高岡地域北前船主の複合経営と富山県経済)

第Ⅲ部 地域社会と北前船主

第6章(旧金沢藩有力船主と地域経済・社会の展開)・第7章(旧小浜藩有力船主と地域経済・社会の展開)・第Ⅲ部補論(三國・敦賀湊北前船主の御用と福井県の産業化)

終章(日本の産業化と北前船主)

序章で示された本書の課題は次のようなものである。すなわち、一九世紀中頃より一九二〇年代に継続した北前船主を対象にして、その経営が近世から近代への転換の中でどのように展開し、近代の経営・投資行動にどのような影響を与えたか、具体的には彼らが産業化に果たした役割を明らかにするという。その際にこれらの経営の地域への影響力を考慮して分析対象も選び、さらにこれを専業・兼業の志向性の別と藩権力などの権力や地域社会との距離の取り方の差異から彼らを三つに分類して、各タイプの事例を

二、三選んでその各個別経営を分析検討するが、アトランダムに事例を選ぶのではなく、多数の客船帳により六隻以上の船を所有したことがわかる廻船主の中から選択している。第一のタイプは北海道産物扱いを主に海運関係部門に進出した北前船主であり、地域社会との関わりが弱い、つまり地域に貢献しなかったタイプであり、これを第I部で取り上げる。第二のタイプは支配権力、藩との関係が弱く、近代には多様な業種に経営展開をし、地域経済との関わりが強い船主であり、第II部で検討する。第三は支配権力との関係が強く御用輸送など御用依存が大きい、明治維新により特権を失い海運業が停滞するもの、土地経営に進出して地域社会との関わりが強かったタイプで、これはIII部で検討している。

第I部は商品・資本市場の視点から経営者の行動におけるリスクと収益の問題を考えると、高収益を取ることを優先させ、産地と販売先に店を持つてこの間の輸送を行い、さらには漁場経営などにも踏み出す垂直統合経営のタイプを扱うことになる。彼らは北海道産物という特定商品に専念したために、他商品経営転換への弾力的対応が困難となり、交通網近代化により海運経営から撤退し、商業以外の分野への転身が必要としたとする。また、彼らは家業・家産志向性が強く、社会志向性も弱いことを指摘している。

一章で取り上げる近江八幡の住吉屋西川家は一八世紀中葉に商場請負に進出し、一八六〇年には場所積出産物の大部分を手船輸送する垂直統合経営を展開した。同家は一八九〇年代末には地元の企業勃興に十分な貢献をしなかったこと、また海運業撤退後も

漁業経営継続や北海道での農場経営などにより八幡との関わりが小さくなったことも指摘する。

二章は加賀国橋立の酒屋西谷家を取り上げる。同家は荷所船の船主であるが、買積み経営に転換してからは北海道産物を専ら扱い、一八九〇年に箱館支店を設け、垂直統合経営を進めるようになったとする。一九〇〇年代には漁業経営へ転換し、同一〇年代には海運業から撤退し、その後、貸金業や銀行預金・有価証券などの資産運用を積極的に行ったが、土地投資は少なかったという。また、同家も地元の企業勃興に無関心とする。

I部補論は垂直統合経営を進めた、北陸親議会を結成した石川県瀬越・橋立の廻船主や福井県河野の右近家などを扱い、家業・家産指向性が強く、彼らの経営展開は北海道漁業・同農業や中央の資本・金融市場を利用した資産運営にたどりつき、出身地経済との関わりは弱いままであったことを指摘する。

II部は北前船主による地域の産業形成を考えると、地域の経済主体と経済構造の関連を考えると、多業種に経営を展開させ、しかも近世に領主や地域との関わりがそれほど大きくなく、近代には柔軟に経営を展開させられた第二タイプを検討する。

三章の青森県野辺地の野村屋野村家は、廻船問屋で盛岡藩の御用輸送も行ったが、下り荷を上方の木綿に特化していた特徴を持っていたという。同家は松方デフレにより廻船経営を縮小し、一八九三年には同経営から撤退しているが、一八九九年に銀行業に進出し、また、牧場経営で地元畜産業にも貢献したことも指摘している。

四章は新潟県鬼舞の伊藤家を取り上げる。同家は幕末には大規

模倣船所持者となり、今町・新潟を拠点に地元米や塩・砂糖・昆布などを取引したが、松方デフレ後の一八八〇年代後半に北海道産魚肥を取り扱うようになった。一八九三年には前年に設けた小樽店を本店とし、西洋型帆船による運賃積みへ転換したが、一九〇四年には撤退し地元農業経営に力を入れたものの、地元企業勃興にかかわらなかつたことも指摘している。

五章、石川県湊の熊田家は一八世紀末には遠隔地間交易に乗り出したが、北海道へ進出して同魚肥を扱うのは近代であった。一八八〇年代中葉に秋田米から北海道産鱈魚肥を取り扱うようになったが、経営が困難化し一九〇五年には運賃積みを本格的に行うようになった。また、同年に小樽出張店を開設し、漁場経営へ積極的に乗り出し、さらに一年には商業部を設立し、一三年には北海道に農場を設けるなど多角化し、二〇年代には多くの会社の経営にかかわった。なお、一八八二年より地元の土地取得も進めたが、地元企業勃興に最も貢献したのは同家のような中規模北前船主であったことも指摘している。

補論では富山県の東岩瀬の馬場家や高岡地域の菅野家などを取り上げる。富山県は一九一〇年代から人造肥料工業を主とする化学工業など工業生産を増大させ、しかも特定業種にかたよらない多数の会社が在方の町も含めて設立されたこと、北前船主は土地経営、魚肥移入、北洋漁業進出、人造肥料工業展開を通して大きく貢献したとする。

第三部では地域社会の視点から、藩との結びつきが非常に強い有力北前船主を取り上げている。彼らは地域社会との強い関係も持っていたために、維新後の産業勃興期に企業勃興などに積極的

に取り組むものの、松方デフレ以前や同デフレにより衰微し、地域経済展開に寄与できなかったタイプとする。

この六章は越中放生津の綿屋宮林家を取り上げる。同家は網元で藩米の輸送も行ったが、綿の買い積みを主にして盛期は一八五〇年代であった。維新後に北海道交易に乗り出し、銀行や海運会社など諸会社にも参加、出資したが、松方デフレで解散などして家産をかなり失った結果、土地経営を専ら行なったとする。ただし、新当主が成人した一九〇七年頃から会社経営や株式投資を再開し、その後に地域の産業化に貢献したことを指摘する。

七章は若狭小浜の古河屋古河家を取り上げる。同家は米手形役所頭取を務め多額の御用金も度々負担した。同家は一九世紀には北海道交易を始めたが、多品種商品を取り扱ったこと、また諸藩の御用輸送も行ったことを指摘する。幕末に大きく資産を減少させたが、一九〇〇年前後から分家とともに地域の銀行・汽船会社など企業勃興に関与したという。

補論は三国の内田家・森田家と敦賀の大和田家などの船主を扱う。内田家は松方デフレにより海運業から撤退したが、同家より御用金負担の少ない森田家は醸造業を行っていたために同デフレ後に多角経営へ展開でき、また大和田家は北海道交易を基盤に置く新興御用商であり、近代初めに敦賀に本店を置く銀行がなかったことが幸いとなり、その後の銀行業進出など企業化がうまくいったとする。

終章の一節では、北前船主は垂直統合経営を進めるタイプと本支店の複数の拠点を生かした多角化を目指す複合経営のタイプに分かれたが、近世の経営形態は近代にも継続し、一八七〇年代後

半のインフレ期の商業蓄積をもとに展開した多角経営が地方の産業化を進める大きな機動力になったとする。次に北前船の概念につき、特に輸送形態を従来のように買積船とするのではなく、運賃積みなども行う多様性を把握すべきと指摘する。さらに北前船主は全体として一八九〇年代の企業勃興に貢献できなかったが、富山・石川・福井三県のみは地方銀行の担い手となることができ、また会社設立の参加は金融流通部門となり、一九一〇年以降の海運撤退から株主・社債保有者として関与するものであったという。二節は北前船主が企業勃興期に家業外の株式投資をあまり行わなかったために北陸地域の製造業の会社設立が展開しなかったことを大阪との比較で指摘し、両地の有力商家の資金力と経営志向性の差異を基礎にして日本の産業構造の地域間の差異が形成されたとする。最後に三節では展望として北陸地域の産業化が、富山県は人造肥料製造が農業生産増大をもたらし、福井・石川両県は絹織物業が製糸・養蚕業発展をもたらす農工商産業連関を伴い、パランスのとれた経済成長を地域に生み出したこと、その背景には北前船主の家業維持と複合経営の兼業志向もあり、多様な雇用機会が地域に確保され、これにより大都市との生活水準の格差拡大が押しとどめられたことを指摘している。

北前船のこれまでの研究では個別経営を多数、しかも日本海沿岸地域全体に及んで分析することはみられない。ところが本書は日本海沿岸を主とした広域の多くの船主家の個別経営を、しかもその経営史料を、近世も含めて近代につき詳細に分析している点が目撃されるべき点である。いずれの家の分析も貴重であるが、評者のように富山県に住む者には、越中放生津の宮林家が所

蔵する文書が本格的に調査、分析されたことはとりわけ注目されることである。また、越後鬼舞の伊藤家の文書は故人の当主が使用紹介されることのあったものであるが、初めて本格的な経営分析が行われ発表されたもので、これも注目される。他の北前船主家の経営分析も、先行研究が若干あるといっても、それらを踏まえた上で分析されたこれらも大切な仕事であり、今後これらの個別分析は貴重な成果として北前船研究に裨益するところが大い。

もちろん本書は個別事例分析を単純にまとめたものではない。地方有力資産家による近代の産業発展の役割を北前船主研究により前進させた研究として評価できるものである。北前船主がその獲得した富をもとに投資する事業展開の方向性をリスクの取り方という観点から類型的に把握し、またその経営志向性を権力との距離の取り方や地域社会とのかかわりの取り方という点からもそのタイプを析出して、さらには対象となる日本海沿岸各地域における北前船主による企業展開の特徴を、多くの全国的統計資料も駆使して、また数多くの補充事例も加えて比較分析して明らかにしようとする意欲的な仕事である。そして、この検討によりその経営の複数の方向性が提示され、松方デフレを乗り切り、地域の企業勃興に大きく寄与した北前船主のタイプが示されたことは評価される。

また、本書は著者が評価する現代にとつて好ましい農工連関型発展を招来した地域を抽出するという現代との関わりをも重視しているが、とりわけ興味を引かれるのは、彼らの地域社会との関わり、社会性を重視し分析している点である。明治に入り没落す

る船主も多く、その中に地域のために事業取り組みをし、家産を傾ける者もあり、彼らの評価が当該地の地域史の中で当然に高いのであるが、こうした船主の登場の背景を北前船主の社会志向性の有無の問題の中で位置づけていることでも注目される。

さて、本書では経営のリスクの取り方や地域志向性、社会指向性などの点を重視して課題を検討することを目指しているが、利用している史料は専ら経営帳簿・取引関係帳簿である。これらにより把握された経営の結果による著者の判断ではなく、やはり経営者、北前船主の経営判断がそれぞれどうなっていたかを是非とも知りたいところである。この点で肝心の史料である当主の日記や書状、記録などをもとに彼らの経営方針と経営選択、領主との関係の取り方まで踏み込まないのではものたりない。近世はともかく、明治に入ればそのような史料も残されているのではなからうか。北前船主による設立会社が銀行・運輸などに集中し、工業部門の会社設立が南関東・東海・近畿臨海地域に比べてかなり遅れたと指摘する点や、彼らの家業維持と複合経営の志向性が第一次・第二次・第三次産業のバランスのとれた産業構成で生活の豊かさを目指す道を切り開く方向にあったとする結論的な点の背景、要因理解のためにも知りたい点である。

本書では北前船主経営の経営形態について類型を設定している。その類型では垂直分業経営と複合経営は専業か兼業かという同じレベルの区分であるが、御用形態の区分はこれと異なり、また近世という時代規定となるもので、これを同時適用するのはあまり適当ではなく、そして御用依存の度合いが問題となるために事例が妥当か問題を残すものも生み出している。複合経営事例とされ

る秋野家は酒田の本商家と比較しての藩依存の弱さから複合経営タイプに位置づけられており、また御用経営タイプの加賀藩の宮林家は、藩米輸送に大きく依存していたようになってはいるが、史料の裏付けは弱い。

本書は地域社会との関わり重視という点から、日本海沿岸地域内での地域的特徴把握にも務めている。地域性という点では、近代化や資本主義成立と真宗信仰の関係が問題とされ、この点で北陸が目目されており、北前船展開地域の企業勃興は、地域社会志向性を権力との近さからだけとらえるのは不十分となる。特に全家産を地域社会に捧げた藤井能三や、窮民救済に積極的な内田惣右衛門の場合は個人的資質の問題もあるが、それでも彼らのような人物を生み出してくる北陸地域の背景が別に把握されなければならぬ。なお、複合経営の富山県の代表的事例とされている高岡の菅野家は、内陸の商業都市高岡の、しかも川湊となつていた木町とも無関係な商人である。資産蓄積に北前船経営が大きな役割をはたしたとしても、本来は海商とは別の内陸商人で、飴・砂糖から多様な商売を行う中で北前船経営に進出した商人であり、元来の船持ち商人という点から多角的経営が行われたわけではない。経営形態ではないが、このような商人の類型的な位置づけも考える必要があることになる。いずれにしても、北前船主の類型については、さらに検討が必要である。

次に、著者が高く評価するこの農工連関の産業発展が北陸にまたその富山でみられたことであるが、その要となる産業の人造肥料製造は、著者も指摘するように富山の電力の安さからも立地している。富山の電力産業は売薬産業の資本蓄積に支えられスター

トするなど、富山の産業発展に対する売業資本の寄与した大きさはつとに知られている点である。そして、著者の指摘する郡部町方での企業展開という富山県の特徴は近世来の村部とその町場の商品経済展開を前提としていることも考えられ、北前船主の農工連関型発展に果たした役割をあまり過大に評価できないことになる。なお、この富山県の代表的船主として取り上げる東岩瀬の道正屋馬場家が富山売業薩摩組と緊密に動き、蝦夷地との取引に進出していることや、富山藩との結びつきでも成長していることを先に評者は指摘しているのであるが（『富山大学教育学部紀要』五三号掲載論文、後に深井著『近世日本海運史の研究』九章に収録）、こうした点は本書でふれられていない。また、近世の営業を綿取り扱いとしているが、著名な安政期の新川郡内職業調査（『富山県史』史料編IV近世中附録に収録）は道正屋が綿商だけでなく肥料商であることも明記しており、同家が蝦夷地産肥料も扱い、蝦夷地との取引を行っていたことは間違いない。

本書では北前船自体の概念の再検討についても取り上げ、輸送形態につき買積みに重点を置く通説は妥当でないとする点に最後にふれる。これまで北前船概念については多くの方が論じている。しかし、北前船を買積船としての側面だけでとらえるのでは

なく、運賃積みを行う面も評価するのは早くに一般的理解となつてはすである。北前船を買積船と定義した代表的研究者の牧野隆信氏自身も一九九六年に刊行された「北前船研究の歩みと課題」（柚木学編『日本水上交通史論』六巻）では「買積みを北前船の定義にまで入れるのは、少しく疑問を感じる」と記しているのである。

いずれにしても本書が北前船研究に大きな貢献をする意欲的労作であることに変わりはない。「あとがき」によれば、今後著者は民衆生活に研究課題を移すと記されている。本書終章の最後に北陸の生活と文化の豊かさを評価することを記しているところから、著者は今後北前船主家の史料なども利用してこの研究を進められるようなので、新たな船主家文書の調査なども実施され、北前船経営の研究も継続し、北前船研究をこの新課題も含めてさらに進展させていただくことを願っていることを記して結びとしたい。

（A5版 四九六頁・索引一四頁 名古屋大学出版会）

二〇〇九年一月 七六〇〇円）

（富山大学人間発達科学部教授）